

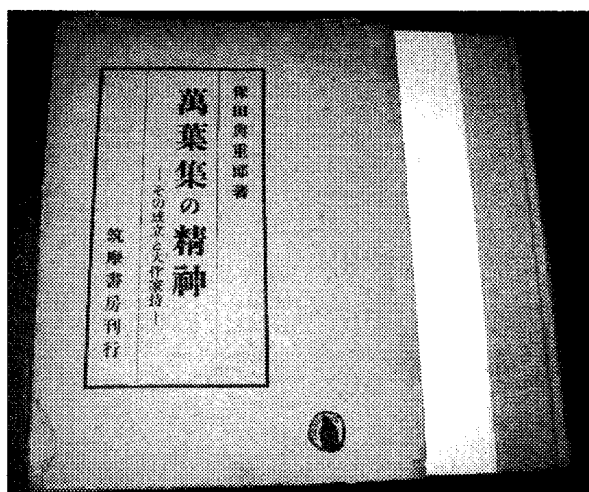
保田與重郎『萬葉集の精神』の構造可視化

—— 日本語文章の絵解き ——

谷 口 敏 夫

1 はじめに

これまで行ってきた日本語文章の可視化については、平成17年に発表した「保田與重郎『日本浪漫派の時代』の構造可視化」^{*1}を参照願いたい。



さて、本論で扱った『萬葉集の精神』はこれまでのテキストと比較してどのような特徴があるのか。最初にそのことを記しておく。(写真は昭和十七年十一月再版：初版は六月)

本書は、評論家保田與重郎が昭和十七年六月、筑摩書房から刊行した。谷崎昭男の解題^{*2}によれば、一本としての構成は、一千枚の原稿のうち前半は各雑誌に出され、後半はすべて書き下ろしとなっている。作品の「序」には保田が昭和十六年から十七年にかけて執筆したとあり、また図書終部には、このうち後半の半歳をかけて推敲したことが記されている。最終章にあたる「運命」第二節冒頭で、「始めて本書の筆をとつてからほゞ歳餘、即ち昨秋正倉院の御物を拜し、萬葉集についての年來の考を記述しようと思つたころから一歳をへて、再び秋冷の候となつた。」とあり、

* 1 谷口敏夫「保田與重郎『日本浪漫派の時代』の構造可視化」京都光華女子大学研究紀要、43 (2005)、pp23-65 (本稿での手法、ソフトウェアなどの詳説を含む)

* 2 講談社『保田與重郎全集』 第15巻

勘案するなら昭和十五年の秋から、十六年の秋にかけて執筆し、その後半歳かけて昭和十七年六月に上梓したと考えられる。

執筆時期について筆をとったのは、この時期が丁度昭和十六年十二月八日という、日米が開戦した歴史を挟んでいるので、内容を付度するに際し背景が明確となることを考慮した結果である。

今回の調査研究の目的は、これまでの経緯から保田與重郎にあっては、萬葉集に関する論考が彼の精神世界の中核にあると考えられるので、その初期における最も大部な本書からその詳細を見ることにあった。版面の原稿用紙で一千枚の評論というのは、他に比して相当に重い。これを保田は数え年三十二歳で上梓した。一人の思想家・保田與重郎の全貌を知るには、さけて通れない作品といえる。

通読すると、「難解」「晦渋」「教条」「論理の飛躍」と、これまで保田にあてられたあらゆる批判がこの作品には色濃く残っていた。特に図書前半について、序、萬葉集と家持、慟哭の悲歌、嗚咽の哀歌、言靈の風雅、この五つの章では、保田の当時の「文芸、学芸、思想界、學術世界」に対する反駁が重ねられている（1-116（116頁分）/524）。現代の視点だけで見るならば、その論難する背景が不明瞭のまま、保田の激しい論争に困惑する所も多い。思想と時代性との解釈の難しさに終始立ち止まらざるを得ない。それは、保田の満三十一歳という若さだったのか、あるいは時代が日米開戦のまっただ中だったからなのか。後世、特に終戦後保田が他から批判された部分が、露出した作品と言える。

しかし、章が六つめの「時代（一）」に入ると、家持と萬葉集と続日本紀以外のことへの言及が激減し、終章にあたる第十二章「運命」にいたるまで安定した論を展開している（117-524（408頁分）/524）。

このように、図書の導入部は、戦後の安定した保田の著作に比べて性急なところもあるのだが、それでもなお当時三十代前半の保田が、神のごとき柿本人麻呂を壬申の乱の回想に描き、対するに人として神の詩境にいたった家持を描き、そこに「萬葉集の精神」をひもといた、その当時における、そして現代における保田の存在意義は、十分に伝わるものがあつた。感傷的、優柔不断な歌

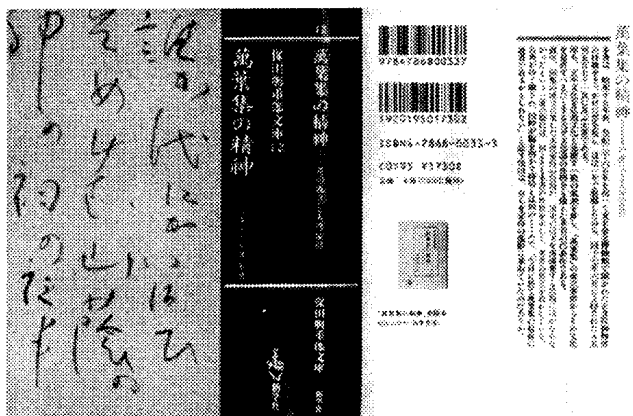
と言われかねない貴族の家持が、なぜ実質的に万葉集を編纂し、度重なる左遷、政治的失墜のなかでこの集を編み、一体何を言おうとしたかが十二分に描かれていた。

現代では、序盤にあって立ち止まってしまう読者も多いだろうが、巻措いた時、万葉集と大伴家持の姿は、たんなる文化詩集、万葉集の編纂をした著名な歌人、という通常の印象を大きく越えたものとなるであろう。家持に、青年の日の匂い立つような和らぎを持った歌があったとしても、家持は文弱の徒ではなく、優雅なだけの貴族でもなく、まさしく武門・大伴氏の名を負うた武人でもあった。

当時、そう言う歌が詠われたこと、そこに人々がものを考え感じ、歌に託したこと、国を維持・護持する精神を明らかにし、すでにかつてあった歴史の精神を明確にすること、言葉にすれば「国風」とか「大君信仰」になるわけだが、それを家持の精神にすりよせて可能な限り描きだしたことに、保田の傑出した姿が理解できる。なるほど「神」「国風」「大君信仰」と現代に記せば、その不明瞭さに多くはたじたじとするであろう。しかし、ことは「精神」、心の持ちようをはかること、推量すること、把握することである。保田は家持の精神、心の向いた方角、心の有り様を昭和十年代に綿密に解いたと考えればよい。

2 実験・調査の目的と方法

本論の目的は、昭和十七年の『萬葉集の精神』（写真は文庫版）を、用語の



頻度によって可視化し、保田の意図した、家持にみた万葉集の精神を、彼の図書の構造から考察するためのものである。この目的を明確にするために、あらかじめ粗く抽出した用語集合から、事項名や人物名を名寄せし異同をただした。

その上で、用語間のクラスター分析をし、意味のあるクラスターをいくつか抽出し、これを地図化した。地図上にあらわれたパターンをテキストに当たり、小概念として確定した。つまり、図書全体を構成する小さな概念の相互の関連を把握することが、本論の目的である。これは従前の一連の手法と変わりはない。

本論の方法論について説明すると、まず作品に現れる人名・事項を中心にする。人名としては柿本人麻呂、大伴家持らの万葉歌人、そして奈良時代の主立った天皇、橘諸兄や藤原家の政治家が頻出する。これらが文章中に、どのように現れるかを、通時、共時^{*3}の両面から分析する。このことで、家持、および万葉集の精神を描いた保田の精神の構造が確認できる。

2005年に行った『日本浪漫派の時代』の考察では、文学史であるにもかかわらず通時的分析がほぼ無効だった。以前の『日本の文学史』では内容が編年体の文学史であることから、通時性の分析が有効だった。このたびは、保田があしかけ二年をかけてまとめた、万葉集、大伴家持という一定のテーマであることと、比較的大部であることによって、通時・共時、両面の分析が可能となった。

実験と考察に使用したテキストは初版ではなく、新学社、2002年『保田與重郎文庫12 万葉集の精神——その成立と大伴家持』とした。本文総頁が524pあり、これは先回の『日本浪漫派の時代』が365pだったので、大著といえる。テキスト総量はおおよそ343000文字（686KB）、400字原稿用紙換算をすると860枚の作品であるが、実際の版面としては一千枚と考えて良い。目次を以下に示す。

- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| 1. 序 | 5. 言霊の風雅 | 9. 青年 |
| 2. 万葉集と家持 | 6. 時代（一） | 10. 時代（二） |
| 3. 慟哭の悲歌 | 7. 少年期 | 11. 回想と自覚 |
| 4. 嗚咽の哀歌 | 8. 家庭と文化 | 12. 運命 |

* 3 通時は事象を時間の流れ、前後関係で見る視点に立つ。共時は同じ時間帯での事象の共起を見る視点に立つ。

3 文章地図

最初にテキストから、KT2システムで粗く用語を取り出した。この手法も従来通りである。これらに手を加えずに整理したのが、表1である。この表1からはテキストの傾向、語彙、用字用法の全体像がつかめ、そこからより精緻な文章全体の地図を造ることができる。

3. 1 用語の分類

この表1では人名を太字とした。ただしこの段階では名寄せがなく、全体を表しているわけではない。高頻度の120用語までを抽出した。本論では人名や事項名について、この表1であらかじめ概略を把握した上で、より精緻な名寄せ作業を行うことになる。表1から、テキストの特徴がいくつか見られたので次に述べる。

(1) 人名・人物の概略

上位頻度120用語までに含まれた人名は19名だった。これを、万葉歌人、政治家、天皇、学者という区分で見ると次のようになる。

歌人 {**(大伴) 家持**、**(柿本) 人麻呂**、**(大伴) 旅人**、**(山上) 憶良**、**(山部) 赤人**、**(大伴) 坂上郎女**} 6名、頻度計1260

政治 {**(藤原) 仲麻呂***⁴ = 恵美押勝、**(橘) 諸兄**、**長屋王**、**(藤原) 廣嗣**、**(藤原) 不比等**、**道鏡**、**大津皇子***⁵} 7名、頻度計469

天皇 {**天武天皇**、**聖武天皇**、**文武天皇**} 3名、頻度計201

学者 {**契沖**、**(鹿持) 雅澄**、**(本居) 宣長**} 3名、頻度計130

* 4 仲麻呂には、藤原仲麻呂と、阿倍仲麻呂があるが、ここで阿倍仲麻呂を指すのは2例なので、名寄せ前のデータとしては異同を無視した。

* 5 大津皇子を政治家とするのは異論もあるが、歌人とするよりも妥当と考えた。

この数値は名寄せをしていないので概略となる。たとえば藤原仲麻呂と恵美押勝とが同一人であることは現れてはいない。その概略という範囲でみるならば、万葉歌人として現れた6名は頻度総数が1260となり、突出している。このことから、本作品が万葉集歌人に焦点を合わせていることは明確になる。中でも、家持(777)、人麻呂(161)、旅人(139)の三人は高頻度である。政治家の藤原仲麻呂が125、天武天皇が93、契沖が52頻度からみて、大伴家持の777頻度という数値は特別なものと考えて良い。もとより「その成立と大伴家持」と

表1 用語の頻度 頻度上位120/15201(太字は人名)

頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語
777	家持	83	慟哭	49	悲劇	38	坂上郎女
569	萬葉集	83	諸兄	48	事件	38	行幸
502	精神	81	長屋王	47	論理	38	古事記
357	思想	79	理解	47	不比等	37	氣持
344	歴史	78	天平	47	創造	37	作者
256	時代	76	自覺	47	記録	37	原因
207	古典	76	皇子	45	赤人	36	國民
199	當時	74	回想	45	女性	36	問題
183	意味	72	詩歌	45	雅澄	36	道義
161	大伴氏	71	文明	44	朝廷	36	筑紫
161	人麻呂	68	悲痛	44	中心	36	御製
151	今日	67	書紀	43	文武天皇	36	宴遊
139	旅人	65	聖武天皇	42	國史	35	民族
138	文化	64	續紀	42	生活	35	風雅
133	藤原氏	61	關係	42	古人	35	大津皇子
125	仲麻呂	61	偉大	41	立場	35	政治
123	文藝	60	自然	41	道鏡	35	勢力
122	表現	59	文學	41	皇神	35	丈夫
122	意識	58	想像	41	皇女	35	越中
121	詩人	57	廣嗣	40	長歌	34	國風
109	日本	57	國學	40	時局	34	生命
100	憶良	56	根底	39	萬葉學	34	古來
99	大君	56	我國	39	草莽	34	言靈
99	壬申	54	大伴	39	心持	34	宣長
97	天皇	54	作品	39	歌人	32	佛教
96	防人	54	最後	39	一族	32	美學
93	天武天皇	53	運命	38	對立	32	人物
90	成立	52	契沖	38	批評	32	心境
90	古代	51	橘氏	38	蘇我	32	左註
88	事實	49	薨去	38	人間	32	陰謀

[1] 総出現語数は：40518 件

[%][2] ÷ [1] × 100 : 37.52 %

[2] 異なり語数は：15201 種

副題にあるのだから当然ではあるが、このような粗い人名抽出からみても、その特徴は明瞭である。

他方政治家をみると、上位レベルの中での総数が469となり、まつりごと（政）の観点から天皇の201を加えるならば、政治関係が670となり、その上位レベルでの頻度総数は万葉歌人1260のおおよそ半数となる。すなわち、本作品は万葉集や家持を「歌」という文芸の枠内だけで論じたものでは無く、常に「政治」が背景にあることを明確に表している。

学者については、これは国学者と限定してもよいだろう。家持らが天平時代の八世紀、人麻呂らがその前史白鳳時代の七世紀とするならば、契沖が十七世紀、宣長が十八世紀、鹿持雅澄が十九世紀の学者達で、これは近世といえる。学者に限って言えば、万葉集と千年間の開きがある。このことから、保田は千二百年前の古典およびその中心人物大伴家持を、二百年前の国学者の考えにそって、二十世紀なかばに論考したといえる。時に保田は三十代前半だった。

人名についてまとめると、保田は万葉集および家持を、当時の歴史の中で考察したと言える。この歴史は奈良時代の政治状況に密接につながっているが、万葉集には意外にも天平時代の政治体制に関わりのある仏教思想や中国の影響が実に少ないことがわかる。ここに保田の結論として、家持は国風であり、万葉集は政治の渦中にあったにもかかわらず、政治体制への迎合はなかったとなる。

（２）事項名の概略と分類

表１に表れた高頻度の用語を通観し分類をし、表２にまとめた。分類の項目は７つにし、「その他」を加えた。各分類内容について以下に説明する。

・人物 頻度総数2497*⁶

人名・人物については3.1(1)で概略を述べた。この粗い抽出語120用語のなかから、さらに「氏」に相当する大伴、藤原、橘、蘇我を追加した。

* 6 全体頻度の中での数値ではなく、上位120/15201用語を選んだ表１の中での総数である。

大方の歌人や政治家は概略を後で述べるが、ここで（大伴）坂上郎女は、八十四首の歌を持ち万葉集の女性歌人として集中筆頭になる。家持の父・旅人の妹にあたり、彼女の娘、大伴大嬢は家持の妻である。当時の大伴氏にあって坂上郎女は家刀自として大伴家の家政を支えた。なお旅人の死後、後年家持が氏

表2 用語の分類 120用例、頻度32以上、10060頻度

人物		文学		朝廷		その他	
777	家持	123	文藝	99	大君	199	當時
161	大伴氏	122	表現	97	天皇	151	今日
161	人麻呂	121	詩人	96	防人	109	日本
139	旅人	78	天平	76	皇子	90	成立
133	藤原氏	72	詩歌	49	薨去	88	事實
125	仲麻呂	59	文學	44	朝廷	79	理解
100	憶良	58	想像	41	皇神	61	關係
93	天武天皇	57	國學	41	皇女	61	偉大
83	諸兄	54	作品	38	行幸	60	自然
81	長屋王	47	記録	36	御製	56	根底
65	聖武天皇	47	創造	36	宴遊	56	我國
57	廣嗣	45	女性	653		54	最後
54	大伴	42	國史			47	論理
52	契沖	40	長歌			44	中心
51	橘氏	39	草莽			42	生活
47	不比等	39	萬葉學			42	古人
45	赤人	39	歌人			41	立場
45	雅澄	38	批評			39	心持
43	文武天皇	37	作者			38	人間
41	道鏡	36	道義			37	氣持
38	蘇我	35	丈夫			37	原因
38	坂上郎女	34	言靈			36	國民
35	大津皇子	34	國風			36	問題
33	宣長	32	左註			34	生命
2497		1328				34	古來
						32	心境
						32	人物
						1635	

精神世界		古典籍		政治	
502	精神	569	萬葉集	99	壬申
357	思想	67	書紀	48	事件
344	歴史	64	續紀	40	時局
256	時代	38	古事記	38	對立
207	古典	738		35	政治
183	意味			35	勢力
138	文化			32	陰謀
122	意識			327	
90	古代				
71	文明				
35	民族				
32	美學				
32	佛教				
2369					

上となった。

・精神世界 頻度総数2369

この精神世界に分類した中に、「古典」というものを含ませた。

一般に萬葉集は日本民族の原始の美をあらはした古典と云ふ、それでよいのである。しかし我々は、それが抽象的な美でなく、一つの生き方としての美を現してゐる事實を思ふのである。原始に於ける素樸な生活感情の美を現すのみでなく、この集の形成そのものは、日本の固有精神の文化を、歴史として精神に傳へんとした意欲になるものであることを私は考へるのである。(言靈の風雅)

保田にとって「古典」とは、復古精神を含んだ心の持ちようを意味し、一つ一つの作品だけを意味してはいない。古典を成立せしめた精神というものに言及することが多い。文学的に優れた作品という意味よりも、それを成立させた「精神」に重きをおく。これは書名の「萬葉集の精神」からも明らかである。

・文学 頻度総数1328

文学の中には國學、國史、道義、言靈などを含ませたので、現代の一般文学概念とは様相を異にする。特に、道義と言靈とについては、保田がしきりに引用する「^{すめかみ}皇神の^{みち}道義が^{ことだま}言靈の^{みやび}風雅に現はれる」との思想をもとにして得られた用語である。これは幕末土佐の万葉学者鹿持雅澄による『萬葉集古義』から保田が継承した考え方で、これが『萬葉集の精神』の基調となっている。

解釈は現代にあつては難解である。保田はこの著書全体、および彼の全文学活動を通して、この「皇神道義言靈風雅」という思想を顕彰したといえる。本論は検証しがたい思想や文学論に傾注する目的を持たないので、簡便にこのことばを翻訳しておく。つまり、皇神道義とは、我が国固有の建国の神話および歴史を貫く物の考え方や感じ方が「国を護る」という志をはぐくみ、その志を言葉にした場合に励起されるものが^{みやび}風雅、すなわち文明である、となる。建国の神話や歴史をどのように見るのかが重要である。それをどう継承し生きるの

か。それを言葉に表すことによって、日本は正しく国を保つことができる、と保田は考えている。

・古典籍 頻度総数738

本書で保田が扱った作品は限定されてくる。表2にあげた、萬葉集、古事記、日本書紀、続日本紀である。他には懷風藻、その他近世国学における作品もあるが、保田が強く言及したのは萬葉集、古事記、日本書紀である。そして家持が活躍した天平時代を描く正史として、続日本紀をあげている。

・朝廷 頻度総数653

朝廷でくくった用語には、大君、天皇、^{さきもり}防人と並ぶ。防人歌を家持が多数採取したことの意味は、『萬葉集の精神』を解く一つの鍵になる。保田は防人歌を万葉集第一義のものとはせず、万葉集の土台となったと説く。図式的にいうと、

＜大君＞←→＜家持の万葉集編纂＞←→＜防人歌＞

となる。ここで現代の解釈として難しいのは「大君」なのだが、防人は大君に対峙するものではなく、朝廷の圧政下にあるわけでもなく、国を支える者として考えられている。そして、家持が志を自覚するとき、すなわち国史を思うとき、朝廷の中に大君も防人も含まれるものとしてある。^{じげ}地下の思いや志は大君と直結しているとするのが保田の考えであった。このことから、防人を朝廷の中でくくった。

防人の歌は萬葉集の二十の巻の大部をなしてゐる。歌数も多く、注目すべき作が多い。しかしこれらは家持の思想を反影してゐる點で、萬葉集の精神の成立に關與するところがさらに多かつたのである。防人の心情の歌は、直接に當時の政局に面した家持の心をうつものが多かつた。さうしてそれにふれた家持は、非常に重大な國のみちと臣の志をそれによつて描いたのである。この思想上の重大さについては、今日防人の歌の盡忠の至情をよく云ふ者も、なほ多く考へてゐない。しかし今の時代はそれを考へねばならぬ日にきてゐるのである。(回想と自覚：七)

・家持の精神 頻度総数513

家持の精神としてくくった「慟哭、自覺、回想、悲痛、運命、悲劇、一族、筑紫、越中」は、それぞれが章題にも含まれている。正確には、保田が家持の精神を付度して使った用語群といえる。これらの用語群からは、初期の穏やかで軽やかで優美な歌を作った家持像が、大きく変わってくる。

筑紫は旅人を中心とした北九州におけるサロン（梅宴）を意味し、大伴氏にとっては恵まれた時代である。この後、家持の時代に大宰府経営は藤原氏に剥奪される。そして越中（745～751）は家持の鬱屈した精神を色濃く宿す僻地司令官時代の始まりを象徴すると言ってよい。家持はたしかに中納言従三位まで昇りはしたが、武門である。軟弱な文人政治家ではなかった。その昇進は遅れ、特に天平宝字二年（758）の因幡守就任は明確な左遷状態であったと言える。

天平宝字三年（759）正月一日、因幡国庁で朝拜した際に家持の歌った一首が万葉集の最終を飾っていた。この時家持は満四十歳、その後六十八歳の薨去まで、二十八年間に歌は一首も残っていないとのこと。

あらたしき年の始めの初春の 今日降る雪のいやしけ^{よごと}吉事

あれだけの重量感のある万葉集の最後の歌が、これほどに無心な白で終わっていることに感動が深い。家持の苦渋の一片たりとも歌になく、ただ言祝ぎがある。そして、家持は歌を断ったのかもしれない。家持の精神の深さである。

・政治 頻度総数327

政治状況について、この頻度上位120用語の中には決定的なものが現れなかった。作品を通読するならば、（藤原氏）「外戚家擅權」が多々出るのが、粗い抽出では得られなかった。他にもたとえば人物に入れた「長屋王」とはすなわち「長屋王の変」であり、政変については大津皇子の謀反、藤原広嗣の乱、恵美押勝問題、道鏡問題と枚挙にいとまないが、これらはすべて固有の事変と

して、頻度数自体に顕著な現れはなかった。

ただ「壬申」については明確に「壬申の乱」であり、これは政治を越えた国内未曾有の内乱、戦争であったことは言うまでもない。この乱に即して、後世柿本人麻呂が天武天皇第一皇子・高市皇子^{たけちのみこ}へささげた挽歌に、保田は万葉集の精神を見ている。

・その他 頻度総数1635

残りの用語を粗わけの中では、上記した項目に含めることが難しく、その他とした。

(3) 用語の傾向

表2の分類内容を図1の円グラフにした。この図1から本テキストでの用語頻度の傾向をまとめておく。

この図1から、人物(26%)と精神世界(24%)、家持の精神(5%)とで、

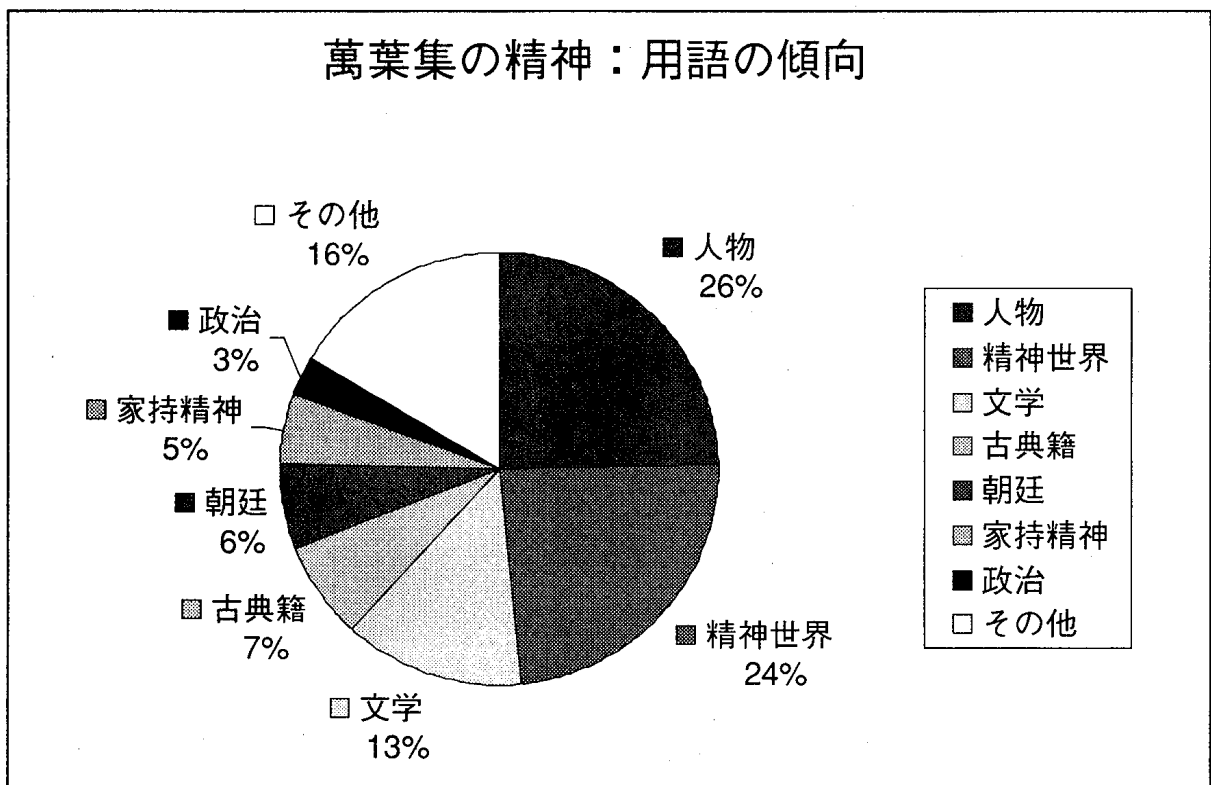


図1 『萬葉集の精神』用語の傾向

あわせて55%を占めており、ここから『萬葉集の精神』とは、なによりも人の精神状況を扱った図書であると分かる。

その精神状況とは、テキストによれば、家持、人麻呂らの「歌」とその歌を生み出した感性、考えが第一にある。第二には、家持の青年期、および彼が萬葉集編纂を始めたであろう壮年期の、対峙した政治家たちの精神状況に保田の筆が届いている。これらをあわせて、保田は家持が国風を尊び、当時の藤原氏を中心とする政治体制・漢風と、仏教文化への反措定として『萬葉集』を編んだと述べている。

また政治と朝廷を合わせた9%と、人物から歌人を引いたものが、当時の「政治状況」を形成していたと、保田がみていることが分かる。ただし、家持については、万葉歌人であると同時に、軍人、政治家の二面を持っていることが、保田の続日本紀引用によって明確になっている。

(4) 用語の地図化

図1では、用語の大分類から全体としての傾向を見た。次にこの元データである表2の各々のテキスト内位置情報を用いて、地図化したものが図2である。この図2から、本書の構成がある程度推量できる。また特異な箇所をみることで、本書の鍵となる考えを知ることにもできる。

ここで用語の前に◎が付いているのは、用語群であることを示す。その内容は表2の代表名に含まれるすべての用語である。たとえば、◎古典籍とは、{萬葉集、日本書紀、続日本紀、古事記}である。

この図2から、◎政治や、◎家持の精神は、頻度数が少なく、このスケールでは明確なパターンは見られない。むしろ、政治とか家持の精神は、本書全体で描かれた内容であると考えてもよい。

◎朝廷が、第六章「時代(一)」と、第十一章「回想と自覚」七節で顕著な現れを見せる。◎朝廷とは、表2から{大君、天皇、防人、皇子、薨去、朝廷、皇神、皇女、行幸、御製、宴遊}である。

この六章「時代(一)」は117-149にあたり、33頁/524の文章量で、前半は聖

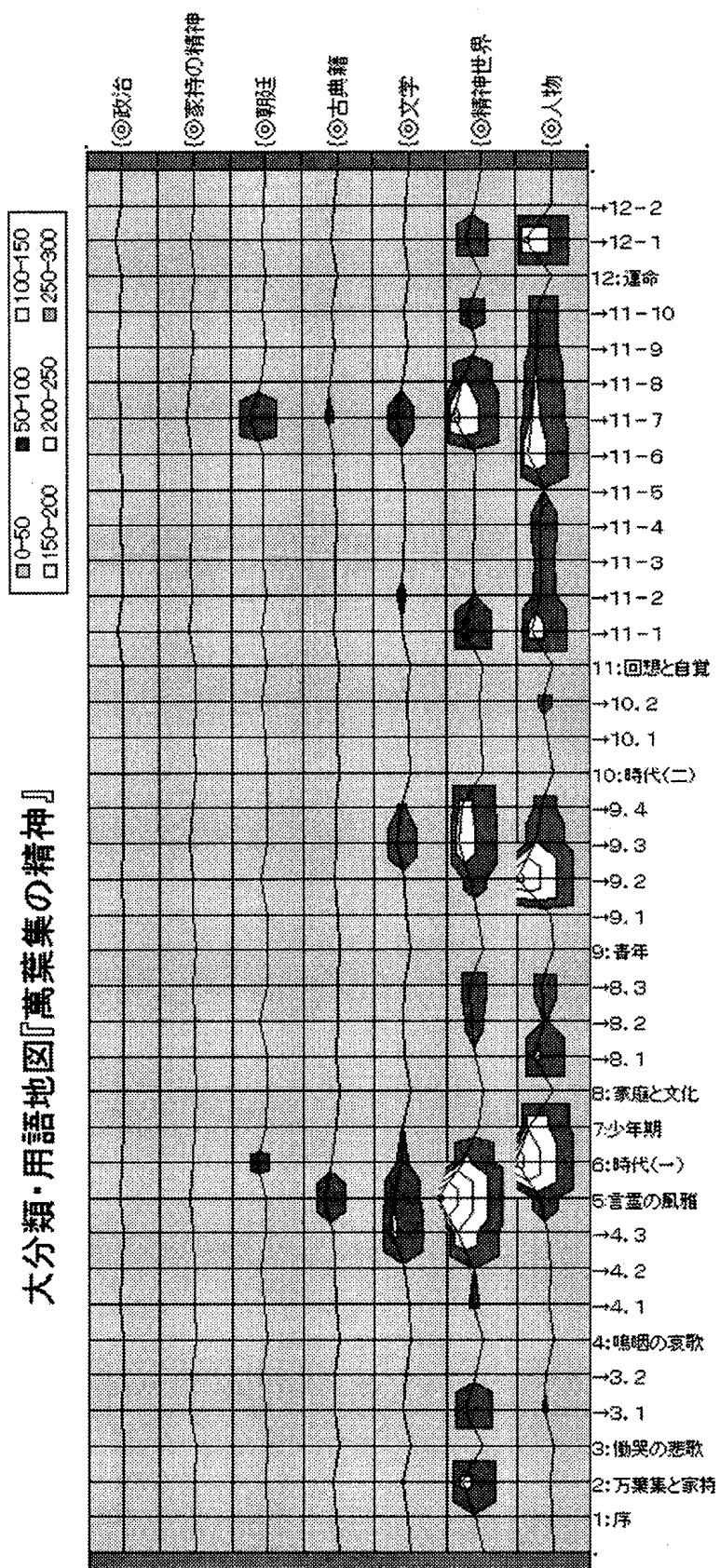


図2 『萬葉集の精神』大分類・用語地図

武天皇と左大臣長屋王の親交に始まり、やがて藤原氏の光明子立后問題と長屋王との対立があり、そして長屋王の変、すなわち「左府の獄」に費やされている。時代は神亀元年（724）以降天平元年（729）ころの数年間である。そして後半は、懷風藻（天平勝宝三年：751）に及び、大津皇子の漢詩と謀反に言及されている。左大臣長屋王は天武天皇第一子高市皇子の長男で、大津皇子の甥になる。すなわち第六章は、朝廷内での藤原氏陰謀とその長屋王の悲劇が描かれている。

十一章「回想と自覚」七節は418-447にあたり、30頁/524の文章量で、万葉集中二十ノ巻に現れる防人歌と家持との関係に費やされている。

古人の自信は、神と大君への信仰があつて生れたのである。彼ら（谷口注：防人）の勤皇の文學は、皇神をみいだす文學でなく、しかとたしかな心を以て平素のくらしにその心を行ひ表す文學であつた。さういふ日に彼らは、人間を思ふ存分に生かし得たのである。さういふ自信がなべてになれば、防人の歌は行はれなかつただらうし、此頃の家持に選ばれる筈もなかつたのである。（回想と自覚：七）

この章節で◎朝廷が特異な現れを見せたのは、用語集合中の「防人」が作用したからである。上記引用に見るように、保田が見た家持がなぜ防人歌に執心したかは、わが国風にあつては大君（朝廷の風雅）と地下（草莽）とが歌という経路を持って直結しているという思想からによる。

◎古典籍が第五章「言霊の風雅」で特異な出現を見ているのは、ここで万葉集と古事記、日本書紀との違いを述べているからである。ただし続日本紀はこの章での言及がない。

萬葉集の描いてゐる歴史の精神は、ある重大な點で日本書紀とも異つてゐるし、又古事記とも異なるのである。～（略）～古事記と異るところは、歴史の精神として明らかにされてゐないと見える。古事記は～（略）～記述が、後尾に至り極めて簡略となり、萬葉集初期の時代について、又壬申前後の史實や、それ以後の重大な國民思想の動向について描くところが少いのである。しかるにわが歴史に於てても、國民思想の樹立の契機となる重大な問題は、壬申の亂を峠とする時代の國の人心と

人倫の歸趨にある。これを書紀はほゞ十分に説くところがあるが、しかしそれらはある指導的モニユメンタル意識に強いものがあるかと思はれ～（略）（言霊の風雅）

これら◎朝廷、◎古典籍と、他の◎文学、◎精神世界、◎人物をまとめてみると、この五つの分類用語群がほぼ共時的に現れる箇所が図2から二箇所浮かび上がってくる。一つは第五章「言霊の風雅」（「少年期」も入る）と、他方は第十一章七節である。これらはすでに述べた所だが、まとめてみると前者では万葉集を他の古典と比較して、それがどのように優れているかが描かれている。後者は、万葉集と防人歌、および家持が防人歌を多数採取した事実に力点が置かれている。

以上の論考により、粗い用語を抽出し大分類した結果、『萬葉集の精神』の鍵は、記紀との異同にあるということが類推できる。保田は、古事記、日本書紀、続日本紀に現れなかった当時の人心、歴史観を万葉集が表しているとしている。現代的な意味での詩歌芸術のスタイルを論じるよりも、それらを詠い残した人達の心の有り様から、当時の人々の精神を顕彰している。

3. 2 人物と事項の認定

これまでの論考は、テキストから粗く、頻度の多い用語を抽出し、そのデータをもとに『萬葉集の精神』をみてみた。この方法論と考察によって、複雑・長大なテキストであっても比較的簡便に概略が分かってくる。

しかし学術図書にあっては背景に潜む知識世界が一般のテキストとは大きく異なる。また文学的な用語とは、執筆者ごとに異なり、その用語の使用法が作者の特性を示すことも多々ある。本事例ではなかったが、著名な本居宣長は、保田の別の作品では終始、鈴屋大人（すずのやのうし）と表記されることも多い。そのことが、保田の宣長に対する格別な尊敬、敬愛を意味している。これらは表記を一般人、専門の異なる人が見ているだけでは全く分からない。すなわち、粗く取り出した用語だけでは正確な分析に至らないことが多い。さらに

具体的には、藤原仲麻呂と恵美押勝とは同一人物だが、これは史的な知識がないと一般には識別ができない。

このことから、ある程度人手によって正確な辞書を作ったり、判定することで、人物や事項を名寄せしておく必要がある。本論にあつては、上位出現の人物と、すでに表2で作成した大分類項目の幾つかを対象にして、用語をより精密に名寄せし分析に用いた。それを表3にあげた。

表3は、人物を歌人、天皇・皇族、政治家、近世学者に整理することで以後の説明の助けとした。生没年なども定説の範囲で付加し、天皇については代を最初に付けた。「△朝廷」などの事項は表3の大分類項目を用いた。

表3 人物・事項の名寄せ

↓歌人	文武天皇 (42:697-707)	↓近世学者
柿本人麻呂 (7世紀)	聖武天皇 (45:701-756)	契沖 (1640-1701)
山上憶良 (660-733)	長屋王 (684-729)	宣長 (1730-1801)
山部赤人 (8世紀)		鹿持雅澄 (1791-1858)
大伴旅人 (665-731)	↓政治家	
大伴坂上郎女	藤原不比等 (658-720)	↓大分類項目
大伴家持 (717-785)	藤原廣嗣 (?-740)	△朝廷
	橘諸兄 (684-757)	△家持の精神
↓天皇・皇族	藤原仲麻呂 (706-764)	△政治
天武天皇 (40: ?-686)	弓削道鏡 (?-772)	
大津皇子 (663-686)		

(1) 人物・事項の名寄せについて

表3に表れた人物・事項の名寄せ内容は表4としてまとめた。以後この表4を基に分析を進める。また表4にはメモとして記号をつけている。

{△ ←表2の用語の分類から選んだグループ

{◎ ←人名中心、関連人名、書名などを付加している

藤原仲麻呂の場合以下のようなになる。なお、姓名と姓ないし名はシステムによって二重採取は回避されている。文字列の最長一致で採取するので、事例で

は最初に文字長の長い「藤原仲麻呂」が採られるので、同一箇所ではそこに含まれる「藤原」も「仲麻呂」も重ねて採取されることはない。

{◎藤原仲麻呂	←	{は、代表人名、事項名、かつ名寄せの始まり
仲麻呂		
藤原仲麻呂		
恵美押勝	←	別名
恵美		
押勝		
}	←	} は、名寄せの終了

(2) 人物・事項の概説

次に名寄せした各人物・事項について概説する。人物は簡略のために歌人、天皇・皇族、政治家、近世学者にわけて説明する。

↓ 歌人

柿本人麻呂（7世紀）、山上憶良（660-?733）、山部赤人（8世紀）、大伴旅人（665-731）、大伴坂上郎女、大伴家持（717-785）の6名を対象とした。表4から、{◎柿本人麻呂 人麻呂 柿本朝臣人麻呂 人麻呂歌集 柿本} というように、いくつか冗長性をもたせた。これはコンピュータにとっては不要だが、人間がデータをまとめ、後日確認する際の簡明さを意図したものである。

「人麻呂歌集」を含めたことで、同歌集と人麻呂は同一に扱っている。

保田のテキストでは、万葉歌人として大伴以外に人麻呂、憶良、赤人に主眼を置いているので、他の多数の歌人、たとえば高市黒人や様々な女流歌人については省略した。

保田は赤人の偉大さを讃える。

天平盛時にあらはれて、咏嘆と吟遊の詩人の祖となつたと思はれる赤人の、富士山讃歌が、日本人の千五百年の思想の歴史に及した影響の大きさは、測り難いものである。しかもそこにもられた思想は、完全な大倭人の神の如き心もちである。そ

表4 名寄せ内容

{◎大伴家持	首皇子	古事記傳
大伴家持	}	}
家持	{◎藤原廣嗣	{△朝廷
}	藤原廣嗣	大君
{◎柿本人麻呂	廣嗣	天皇
人麻呂	}	防人
柿本朝臣人麻呂	{◎契沖	皇子
人麻呂歌集	契沖	薨去
柿本	代匠記	朝廷
}	萬葉代匠記	皇神
{◎大伴旅人	}	皇女
大伴旅人	{◎藤原不比等	行幸
旅人	藤原不比等	御製
}	不比等	宴遊
{◎藤原仲麻呂	}	崩御
仲麻呂	{◎山部赤人	}
藤原仲麻呂	山部赤人	{△家持の精神
惠美押勝	赤人	慟哭
惠美	}	自覺
押勝	{◎鹿持雅澄	回想
}	鹿持雅澄	悲痛
{◎山上憶良	雅澄	運命
山上憶良	萬葉集古義	悲劇
憶良	古義	一族
}	}	筑紫
{◎天武天皇	{◎文武天皇	越中
天武天皇	文武天皇	喻族歌
大海人	輕皇子	}
}	}	{△政治
{◎橘諸兄	{○弓削道鏡	壬申
諸兄	道鏡	事件
橘諸兄	}	時局
葛城王	{○大伴坂上郎女	對立
}	坂上郎女	政治
{○長屋王	}	勢力
長屋王	大津皇子	陰謀
}	{◎宣長	}
{◎聖武天皇	本居宣長	
聖武天皇	宣長	

れはあらゆる外來思想を正す發想をたゝへて、最大古典の一つとなつた。(萬葉集と家持)

山上憶良については、家持の父・旅人の友人として、憶良の家持への影響は強いとみている。大伴坂上郎女は萬葉集屈指の女流歌人だが、家持の伯母にあたり、その娘である坂上大嬢は家持の妻だから、家持の義母にもあたる。

父・大伴旅人への評価は、山上憶良よりも上に置かれている。大宰府の長官だった旅人が優雅な筑紫サロンでの雰囲気、環境を家持に提供しはしたが、旅人は家持の少年時代に亡くなった。だから家持が、実際に歌の指導を父・旅人から受けたかどうかについては、保田は明言を避けていた。

しかし家持が憶良に親しんだと思はれる理由は、兩者の作歌の外相でないものからも感じられるのである。父の旅人は、世上今日の批評はともかくとして、私の見るところ、萬葉集中憶良の上にある大歌人の一人である。憶良は旅人に親しかつた。共に九州の地で宴遊し歌を詠じて相和してゐるが、憶良の名によつて知られる貧窮問答の歌は、旅人に謹上したと云はれる。家持は旅人のやうな大歌人を父にもつてゐたが、その父に親んだ期間は年齢の上では短かつた。(少年期)

↓天皇・皇族

天武天皇 (40: ?-686)、大津皇子 (663-686)、文武天皇 (42:697-707)、聖武天皇 (45:701-756)、長屋王 (684-729) の5名を対象とした。表4の◎天武天皇、に見られるが、天武天皇、大海人というように即位後と即位前での名称に異なりがある。諡は引用文中以外は漢風諡号を用いている。以上5名のうち、大津皇子は懷風藻に残された漢詩と、賜死の際の萬葉名歌として現れる。

特徴的なのは長屋王の扱いで、王が天武天皇の孫にあたり、父が高市皇子であることから保田の筆致は厚い。本書が、柿本人麻呂の高市皇子への挽歌によって萬葉集の精神の第一高峰とし、その精神を大伴の歴史の中で回想し自覚する家持を第二の高峰とすることから、壬申の乱への扱いは、文学にとどまらない歴史観に深く及んでいる。

長屋王は皇族としての權威を最後に振はれた御方であつたと思へるのは、王の識見と威令にもあつたが、この王ののち、諸王はおしなべて四位のほどにして、低い官にとゞまれ、建武中興の御世になつて初めて、皇子*7にして權勢の地位にたゝれたのである。即ちのちの長屋王の御運命をみれば、諸王の權勢失墜の因が何によるか明らかである。不比等は、文武天皇の新しい文治政治を翼賛し、律令の制定によつて、外戚家擅權の端緒をひらいたのである。この間諸王の失權事實は、まづ左府の獄にあらはれ、稱徳天皇の朝の變によつて極まつたものがあつた。(時代(一))

家持が後世万葉集を編むにいたった精神の根底には、壬申の乱に対する柿本人麻呂の歌と、その乱の功勞筆頭者高市皇子、その第一皇子・長屋王が讒訴されることで一族壊滅した、そういう政治状況を作り出した藤原氏の専權への反発があつた、と保田は述べている。

↓政治家

藤原不比等(658-720)、藤原廣嗣(?-740)、橘諸兄(684-757)、藤原仲麻呂(706-764)、弓削道鏡(?-772)の5名を対象とした。

家持は717?718~785年の人物だから、不比等との交渉は絶無だが、保田は家持の万葉集を、不比等が築いた藤原氏擅權^{せんけん}への対抗と見ている。

彼(家持)が萬葉集に描いた精神の自覺が、二十一歳の家持に既に深くあつたといふわけではない。だが大伴氏の護持した文化と、藤原氏の指導せんとした文化の立場の根底的對立は次第に明白になつた。～(略)～かくて天平の佛徳と漢風の文化の中で、わが古典はみな固有の精神を旨として傳へたのであるが、その中樞たる萬葉集のさらに中核なるものは大伴氏の一族の精神であつた。文化の上で大伴氏はさういふ形で藤原氏の勢力に對抗し、以來千二百年の今日にまで、國の精神の證を確保したのである。(青年：二)

*7 護良親王ら、後醍醐天皇の皇子を指すと思われる。

4 クラスター分析

クラスター分析をつかって、表4にある人物・事項に関する用語集合間の関連をみた。図3により、いくつかの明確なクラスターが見えた

4. 1 人物・事項のクラスター分析

この図3（デンドログラム*⁸）は用語のテキスト中の位置情報の隣接度計算をして、その用語集合間の類似度を導き出している。4. 2で後述する地図が、用語の位置情報から、用語の出現パターンを二次元表示することに比較して、用語集合の類似度を見るのに適している。

その類似度とは、各用語間にどのくらいの強さで、テキスト中の隣接共起があるのか、どういう用語が文章の中で隣接して使われているのか、という指標である。つまり、そこに意味的な処理はない。結果のデンドログラムを見ると、実際にテキストにあたり、クラスター*⁹の意味を類推し、付与することになる。

本論でのクラスター分析の目的とは、すなわち、あらかじめ用語の意味を勘案するものではなく、用語間共起の結果として、共起した用語は相互に意味上のなんらかの関連があるかもしれない、と推定することにある。その結果として、分析で得られたクラスターをもってテキストにあたり、そのクラスターの有効性、妥当性を計ることにある。

参考のために、基となったデータの総数を表5にあげた。

以下図3から比較的明瞭な四つのクラスターを認定し、名前をつけて考察する。

* 8 デンドログラムとは、樹形図と翻訳できる。

* 9 クラスターとは、デンドログラムに表れた、要素間距離の近い「まとまり」

表5 名寄せ人物・事項の出現頻度

{△朝廷	1059	{◎山上憶良	105	{◎山部赤人	46
{◎大伴家持	798	{◎天武天皇	95	{◎文武天皇	43
{△家持の精神	611	{○長屋王	81	{○弓削道鏡	41
{△政治	512	{◎鹿持雅澄	77	{○大伴坂上郎女	38
{◎柿本人麻呂	170	{◎聖武天皇	66	{◎宣長	37
{◎大伴旅人	143	{◎藤原廣嗣	60	大津皇子	35
{◎藤原仲麻呂	134	{◎契沖	56		
{◎橘諸兄	111	{◎藤原不比等	51		

クラスター▲大伴家持

このクラスターには {◎大伴家持 {△家持の精神、△政治}} が含まれる。便宜上クラスター名を「▲大伴家持」としたが、分析の上では◎大伴家持のクラスター収束位置は図3上、右に偏っているので、用語の位置上での近似は低い。というよりも、有限のテキストの中で、全ての用語は通時的に、ないし粗い範囲で共時性を持つことから、◎大伴家持もどこかのクラスに位置づけられるものである。この場合は、△家持の精神と、△政治にもっとも距離が近かったのだろう。

ここで類推できることは、大伴家持とは決して柔和な歌人・文人だけではなく、奈良に都のあった当時、政治に近いところにあったことが分かる。この証左として、藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱（764）の二年前における家持らの反・藤原仲麻呂・謀議参加記事がある。首謀者「良繼は連類者なしと強辯したので、己は除姓奪位の罪をうけたが、連坐者は出なかつた。」とある。

天平寶字六年二月、仲麻呂正一位となり、獨裁の位置いよいよ確立す。～（略）～續紀の光仁天皇寶龜八年九月の紀文に、この天平寶字六年に於ける家持の動靜について出てゐる。

それによると、この年のこと、宇合の第二子で以前廣嗣の亂に坐して伊豆に流された事のある藤原良繼を中心に、仲麻呂誅伐の陰謀が行はれ、これに加つた者、佐伯宿禰今毛人、石上朝臣宅嗣、大伴家持とある。仲麻呂が宅を楊梅宮の南に作り、東西に棲を高く稱へて内裏に臨み、南面の門を櫓とした。そのことに不臣の譏りあ

つたからと云ふ。(運命)

家持は長岡京造営に付き、死後、藤原種継暗殺の首謀者として官位除籍されたことは著名である。家持の生涯は常にこうした政治状況の軋轢の中にあった。これを保田は次のように述べている。

藤原氏擅權過程とは、つねに大伴氏を何かの陰謀事件によつて讒し、それを杖下に殺戮する上ですゝんだことは、萬葉集に於ける歴史精神を思ふときに考へるべきことである。藤原氏はまづ長屋王の獄によつて、以後諸王の權力を抑へ、以來數度の
大獄に、大伴の一族やその他の舊貴族を倒さうとした。さういふ状態の中から生れた家持の萬葉集に於て、我々は家持が人間の生き方の極端な葛藤場裡をゆきつ、よく大君への思ひを歌ひあげ、人麻呂のあとをうけてその心を人の世の志で描き出し、それを純化して神の體系とし、人間の生命の原理にまで構想した事實と思想を知るのである。(運命)

クラスター▲山上憶良

このクラスター▲山上憶良は、{◎山上憶良}{◎契沖、◎鹿持雅澄}、◎山部赤人{◎大伴坂上郎女、◎宣長}}で構成されている。契沖と雅澄とは国学者として万葉集研究につくした人である。

このうち総頻度数を表5から付加し分析すると、{◎大伴坂上郎女(38)、◎宣長(37)}にはテキスト中では実質的関連がほとんどない。これは頻度数が少ないことと、宣長が各章節ごとに少しづつ出るので、たまたま坂上郎女の頻度が固まる九章「青年」で位置が重なったと言える。

このことから、クラスター▲山上憶良は、まず{◎山上憶良}{◎契沖、◎鹿持雅澄}、◎山部赤人と見、次に国学者を省き{◎山上憶良、◎山部赤人}と、万葉歌人の著名な二人がクラスターを構成したと考えるのが実質的である。ここで、契沖、雅澄は保田がテキスト中でたびたび引く国学者として同じクラスターに含まれている。

憶良(105)と赤人(46)とを比較するならば、保田は憶良を家持の父・旅

人の知人として丁寧に描き、また家持の精神的な歌の師匠として扱っている
で、憶良をクラスター名とするのが妥当であろう。

クラスター▲天武天皇

このクラスターは、{◎天武天皇 {◎藤原不比等 {大津皇子 {◎聖武天皇、
◎文武天皇}}}} という構成である。これは、非常に明瞭なクラスターといえ
る。天武天皇以降の奈良時代を言い表していると言ってよからう。ただし、大

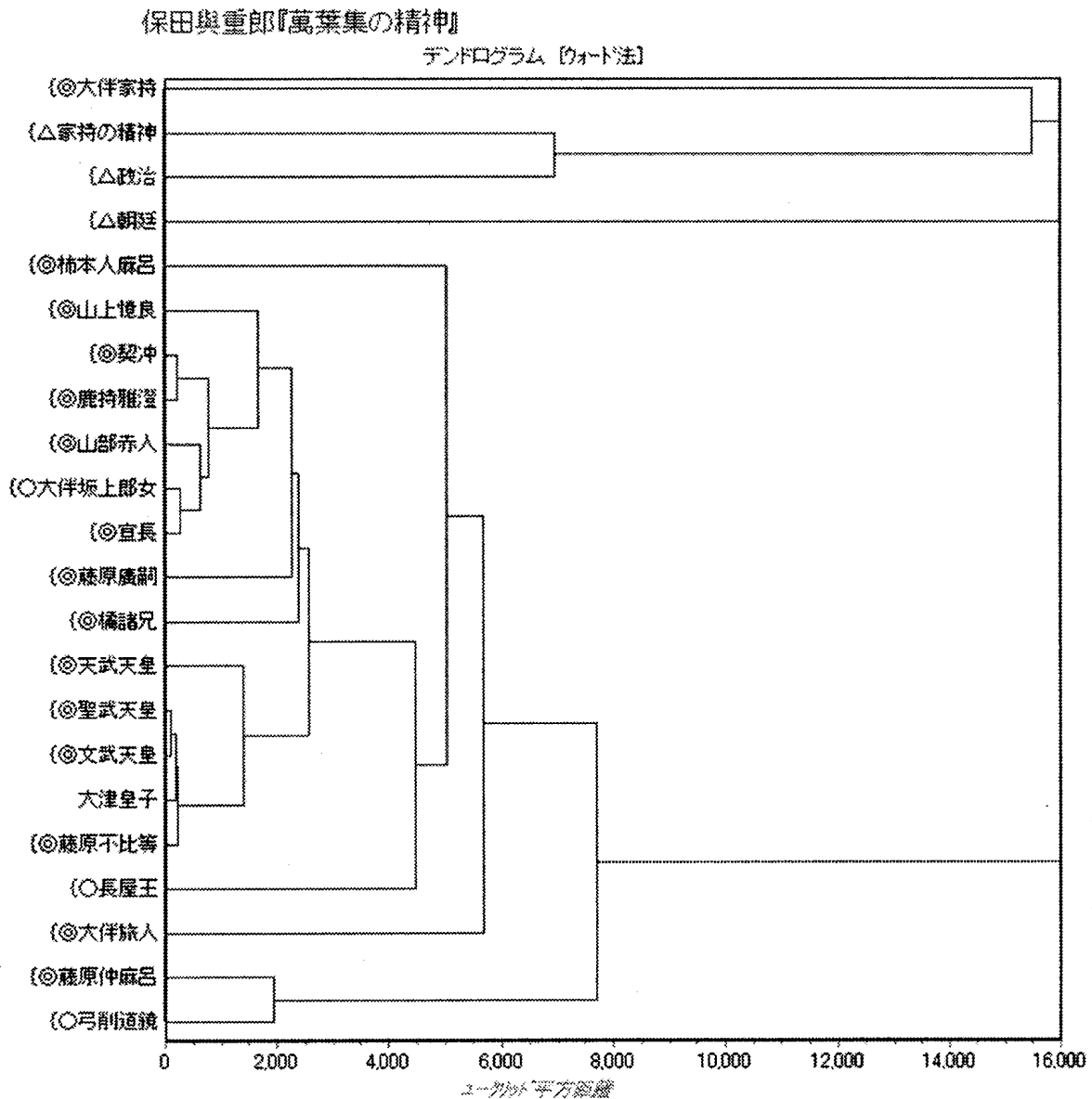


図3 人物・事項のクラスター分析

津皇子の場合は、その謀反に不比等が強権を用いたという意味ではなく、万葉集に名歌を残した大津は懷風藻の漢詩にも著名であることと、他方不比等は万葉集には一首も残さなかったが懷風藻には残しているという点で、共起している。

不比等は萬葉集に一首の歌もとぐめないが、懷風藻には五首の詩を残してゐる。
 ～（略）～大體に於て奈良時代の藤原氏は國風の和歌と關係のうすい家であつた。
 橘氏の催した歌會が萬葉集の一代の頂を描いたやうな意味に於ては、何ら國風文化に及ぼしてゐない。（青年：二）

◎文武天皇（42代）（683～707）は天武天皇の孫にあたり、藤原不比等の娘（宮子）が夫人。宮子との第一皇子が後の聖武天皇。この間、不比等が天皇家を支えたともいえるし、介入し、藤原家の政治権力を強めたともいえる。結果として長屋王ら皇族をはじめ、大伴氏などの旧名家が没落した。

クラスター▲藤原仲麻呂

このクラスターは {◎藤原仲麻呂、○弓削道鏡} で構成される。

仲麻呂（706～764）は藤原不比等の孫で、聖武天皇から孝謙天皇に代が移るころから、光明皇后の信任厚く権力を強めた。皇太子をたてるに際しその専権が橘奈良麻呂らの反乱を招いたが、鎮圧した。この橘氏と家持の親交は厚かった。

やがて、仲麻呂は恵美押勝に改名し、大師（太政大臣）にまでなるが、光明皇太后の死とともに、孝謙上皇と対立し、仲麻呂の乱を起こすも近江で破れ死す。

この時、孝謙上皇の寵をうけ、称徳天皇（孝謙重祚）の信任厚く、その後の国政を左右したのが道鏡。彼は天皇位まで望んだが、宇佐八幡神託事件（神護景雲3：769）にて左遷、その後死亡。

家持と道鏡との直接の關係はテキストにはなかったが、当時の政治状況の中

で、家持は苦しい状態だったと考えられる。この頃の家持は以下の引用に現れている。

家持はこのさき天平寶字八年正月從五位上で薩摩守となり、神護景雲元年八月大宰少貳となる。既に五十歳であつた。淡海三船もこの時家持と並んで大宰少貳となつた。ついで寶龜元年六月に民部少輔となつた。この年八月四日に稱徳天皇崩御、同日白壁王皇太子となり給ひ、十月一日即位さる。そのさき八月二十一日道鏡を下野に貶し、九月六日和氣清麻呂姉弟召還さる。九月に家持左中辨兼中務大輔となり、十月一日正五位下を授けらる。十月一日に神護景雲三年を寶龜元年と改元す。(運命)

以上四つのクラスターを判別したが、家持や人麻呂の頻度が格別に大きく、ほとんど毎章節ごとに用いられ、このためにそれ以外の用語集合の特徴的なクラスターが少なかった。

4. 2 人物・事項地図に表れた小概念

図4は、クラスター分析した結果から得た用語間の近接の程度を、等高線地図の用語並びに適用したものである。具体的には、図の右端上端に表れる項目、◎大伴家持、△家持の精神、△政治、……以下の並びは図3のクラスター分析から得た並びである。すなわち図4の縦項目の並びをクラスター分析の結果から決定し、横軸は文章の通時性によって、左から「1：序」「2：万葉集と家持」……と、一意に設定した。

この図4から、分析の後で「まとまった小概念」を抽出するわけだが、今回の実験では、一般的学術図書や小説と同じく時間軸が堅固な文章なので、通時、共時の両方向によって分析することにした。

本テキストではまず、時系列の推移（通時性）、すなわち下部にある左から1～12-2の各章節でこの図4を見ることができる。たとえば高頻度の {◎大伴家持、△家持の精神、△政治、△朝廷} は「2：万葉集と家持」から始まり、「12：運命」まではほぼ出現する。しかし、△政治は「政治的空白」と図に記し

たが、章節にあっては言及されない部分も目立つ。

次に共時性で見ると、図4中に（天皇と皇族）と注記した「6：時代（一）」では、{◎天武天皇、◎聖武天皇、◎文武天皇、大津皇子、◎藤原不比等、○長屋王}の六名が並んで現れる。不比等は一般に皇族ではないが、天皇の近くにいた外戚であることと、保田が不比等を「天智天皇の皇胤」説に言及していることから、見かけ上同列に立ったと考えられる。

不比等の傳記として古書のいふところは、彼を天智天皇の皇胤とする。大鏡其の他に傳へられる傳であつて、即ち鎌足が、天智天皇の孕妃を賜つたとあり、それを以て藤氏隆盛の因とするのである。それゆゑに文武天皇の詔に不比等以外の藤原氏は舊姓にかへり中臣を稱せよとあるのは、姓氏の混亂をさけられたものであらう。さらに考へるなら鎌足薨去に臨み、俄に賜姓ありしことも、同斷の理由でなからうかといふ。(時代(一))

このうち長屋王の悲劇「左府の獄」は、この章「6：時代（一）」に集中して現れ、他章での言及は少ない。

以下では、4.1で抽出したクラスター「▲大伴家持、▲山上憶良、▲天武天皇、▲藤原仲麻呂」の四つをもとに、さらにテキストを分析し、テキストの傾向と、何らかの小概念（テキストを構成する要素概念）の抽出を考えてみる。便宜上分析の区分は、上述のクラスターをもととする。

▲大伴家持の分析

家持は通時的に四章「嗚咽の哀歌」までは目立って地図上に現れない。これは保田が万葉集を二つの高峰、すなわち柿本人麻呂と家持に分け、この序盤では神のごとき人麻呂の慟哭を描いたからである。人麻呂の慟哭とは、壬申の乱の顛末を回想し、伝統の継承を歌に祈ったことをさす。具体的には、乱に大功あった高市皇子への挽歌（長歌）を指す。未曾有の内乱は、当時の一般知識人にとっても長く憂うることであり、それを収拾した天武天皇・高市皇子らへの称讃と、皇子の死に対する喪失感が歌になったと考えられる。なお衆知のごと

く、人麻呂には旧近江朝を偲ぶ歌もあり、新旧どちらかをよしとしたのではなく、神話的に建国し、それまで国を持続させてきた日本が、皇統継承にあって内乱に立ち至ったこと、そのことの悲劇を慟哭したと考えるとよい。当時の国際情勢における内乱という亡国の危機にあって、それを切り抜けた者達への人麻呂の絶唱がこの序盤の主調であったと言えよう。

すなわち、家持以前に万葉集の素地は柿本人麻呂において高峰をなしたという保田の考えが、この序盤に現れている。

通時的分析からさらに判明することがある。図4中の注として「政治的空白」と記したが、これは主として八章「家庭と文化」～十一章「回想と自覚」の五節（章半ば）までにある。この空白を埋めるものはなにかという視点からみると、明瞭な部分は八章「家庭と文化」での家持の父・大伴旅人の高頻度である。旅人を描くとき、この頃の大伴は優雅さに充ち、大宰帥（大宰府長官）として政治的に安定していたと考えられる。

旅人の生涯に於て、大宰府時代のことは、周囲の多くの文雅の人々の存在によつて、極めてよく傳へられてゐるのである。當時の大宰府に於て、帥老と稱された旅人を中心にした文雅の生活は、天平文化の前行時代の状態を、一人の名門の主人を中心として彷彿せしめるものがある。（家庭と文化：三）

以上から、通時的に見た場合、このテキストでは序盤に柿本人麻呂を置き、その後で家持を描いたという確かな構造が分かる。さらに、全てではないが、家持の政治的関わりが少ない部分を埋めるものとして、父・旅人の詳細に費やされていると言ってよい。

五章「言霊の風雅」から終章までは、家持が殆ど持続的に言及されているので、逆に「家持」という用語は、以後何らかの指標にはならないと考えた。

▲山上憶良の分析

すでに4.1の「クラスター▲山上憶良」で述べたが、保田は旅人を憶良の上

に置いている。しかし大宰府時代の旅人の知人で、かつ憶良が少年家持への歌の手ほどきを思わせる筆致から考えて、山上憶良は大伴家とは近い存在だったとうかがえる。一般に憶良は貧窮問答歌などで知られているが、保田は憶良を社会性の中では捉えていなかった。

図4、地図を見れば判然としているが、憶良は第七章「少年期」で最大頻度を示す。この章は、旅人と少年家持と、そして憶良との関係を表し、家持が九州に父とともにあったかどうかは別にして、そのころの憶良の大伴家との関わりに筆をさいている。

しかし、本論では憶良について保田が最も意を注いだ箇所として、第十一章「回想と自覚」二節に注目し、次に引用する。このあたりの数段に保田の万葉歌人に関する核になる表現が集中している。

憶良が好去好來歌に「神代より 云ひ傳^ツてけらく 空見つ 倭の國は 皇神の い
つくしき國 言靈の 幸^{サキ}はふ國と 語りつぎ 言ひ繼^{ツガ}ひけり 今の世の 人もこと
ごと 目のまへに 見たり知りたり」と激しく歌つたやうな思想は、その最後を
思はす燃焼をなさうとしてゐたのである。わが國のことばの美しさを守らねばなら
ぬ時代に來てゐたのである。しかし好去好來歌の出來たのは天平五年三月一日とあ
るから、憶良はわが身の終りに於て、國の心にも何か最後を思はすものを味ひ、後
に傳へようとした志の現れとも思はれる。由來藝能の文化は滅びようとするもの、
ないしは滅びる怖れにあるものを、その終局の美しさに於て、ことばの神の力によ
つて後に傳へようとするものである。それは創造の根據であつたし、永遠に不滅を
信ずる者の祈念の表現であり、又傳統を傳承する實踐であつた。(回想と自覚：二)

保田は先述の第六章「少年期」では遣唐使帰りの、生活に根ざした思想性に重きをおくインテリ憶良を、それほど評価をしていない。だが、天平五年の憶良の終末期における歌を絶唱として、後の家持につながる肺腑をつく歌心として高く評価する。

憶良はこれを誰に傳へようとしたか、云ふまでもなくその創造の根源に於ては、天地の神に祈つたのみである。それは一つの結果として、生命の原理に對する悲痛

の絶叫であつた。號喚であると共に熱祷であつた。その心情を思ふがよい、言ひつぎ語りつぐと歌つた萬葉人の氣持は、文化を繼承利用するといつた、計算された考へ方や、合理的な思想から生れたものでなく、神を思つた人の生命の最端で燃えた火の表現であつた。詩人は己をその天の火と燃やした不滅の信念の極致で、歴史を回想し號喚慟哭するものであつた。(回想と自覺：二)

「神を思つた人の生命の最端で燃えた火の表現であつた。」このような言葉がなかなか現代では理解しがたいところがあるが、保田の生涯の様々な著述から類推するならば、個の苦楽愛を詠う歌が萬葉集及びその編纂の本質ではなく、歴史の持つ厚み、建国神話につながる人々と神々との関わり、神と通じるための言霊、こういう、一つ一つは今の言葉としては定義しがたい、それでも時代や国に確固としてあつた風儀（基本的理念）を歌いあげるのが、萬葉集の精神だつたと言っている。そういう国風の基本理念が壬申の乱以後、仏教思想と漢風（律令制度やその考え方）によって、危機に瀕している、滅びようとしている、そのことへの危機感や嘆きが萬葉集の基底にはあると言う。そこで、憶良はどうであつたのか。

憶良の詩歌は、上代の世界觀の最後の危機を眺めたものであつた。末期的な時代の中で、自國語の尊嚴を貫くといふことは、萬葉集のいたるところに見られる一つの悲願であつた。その憶良は誰に希望をもたせかけたか、未だ家持の晩年の偉大な存在は知らなかつただらうが、明らかに家持は、憶良が呼びかけ、熱祷したいのちのものを憶良以上に大きく自覺して、自分で己の詩心の火を點じたのである。家持は憶良のあとをうけて、それを一つの結びに轉回したのである。家持は憶良をうけた詩人であつた。しかし家持は、その回想と自覺によつて、赤人も憶良も知らなかつた激しいものを身におぼえたのである。それは偉大といふよりも悲痛であつた。

～（一段落、略）～

人麻呂、赤人、憶良、家持といふ形の系譜こそ、われらの國の文學の血脈の高貴にして悲痛な性格を示すものである。こゝに傳統の果敢な起承轉結の理を悟るべきである。この血脈の示す思想こそ、萬葉集の精神であり、又集の示す國史觀である。我々の歴史觀とはかゝるものであつた。思想の現れはまたかゝるものであつた。しかも近來の人々は、眞の思想とはかゝるものであることについては殆ど示すところ

なく、ただ古代の人の關心の外相を近代の文藝學體系によつて云ふのみであつた。萬葉集時代の世界觀や上代人の思想は、素樸と剛健を主とするなどと云はれてきたやうな單純の美學でなく、この集を撰びし人の道に對しての志は今思ふよりはるかに深かつたのである。(回想と自覺：二)

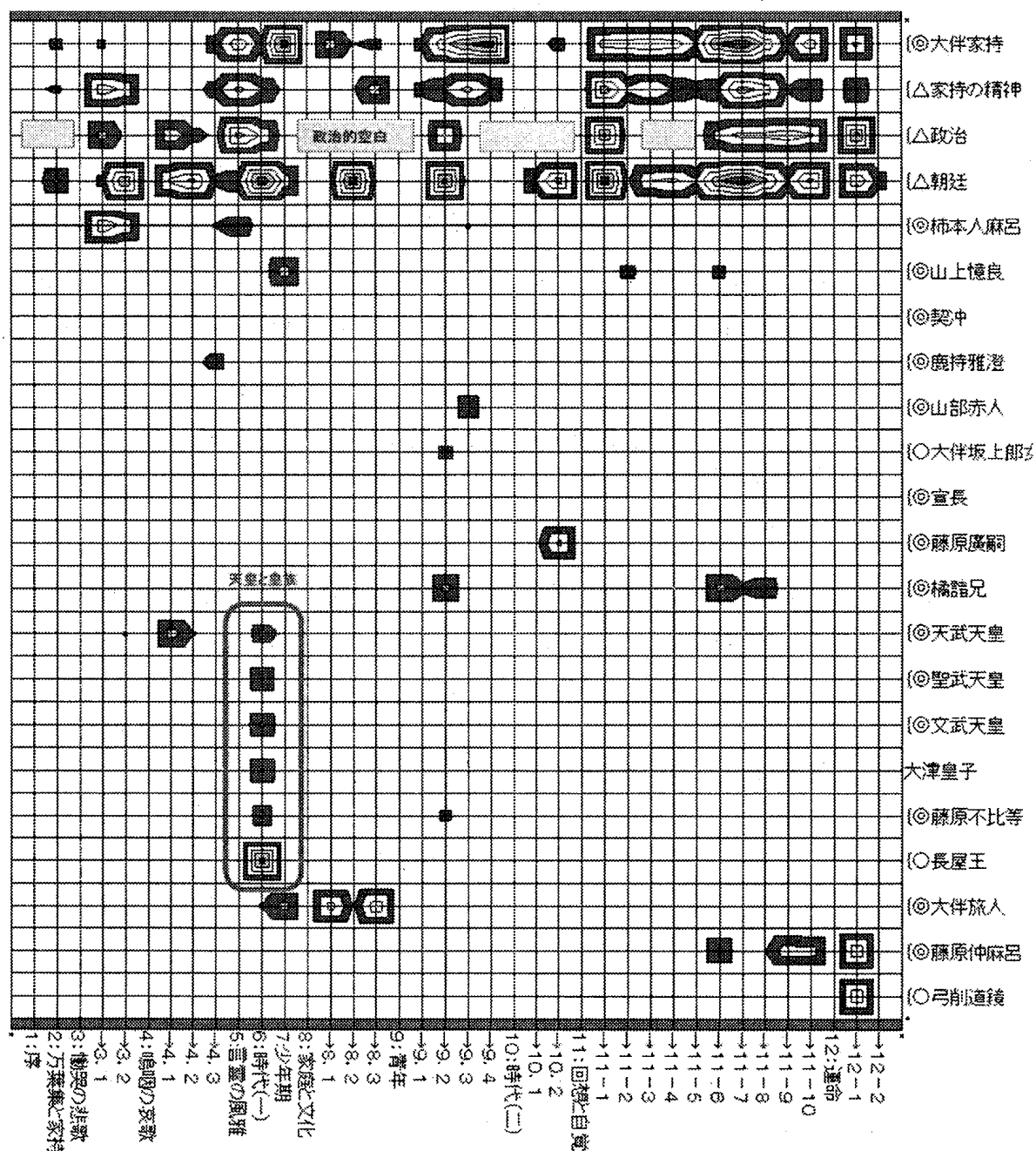


図4 人物・事項地図

このように、山上憶良は、保田によって明確に大伴家持へ続く系譜上にあるとまとめられている。その大伴家は大連、宿禰を名乗り、旅人は大納言にまでのぼり、かつ建国以来の神話の中で有数著名な家柄であった。だからこそ、そこから生まれる家持の自覚、国に対する責任感、他の詩人よりも現実的に切実なところがあったと推量できる。

▲天武天皇の分析

図4で（天皇と皇族）と注したが、第六章「時代（一）」で六名が連なった。○長屋王のマークが最も多く、この章は「長屋王の変」を記している。ここは、通時的に解釈するよりも典型的な共時性としてみるのが妥当である。ただし、天武天皇については、第四章「嗚咽の哀歌」にもあり、そこは人麻呂と壬申の乱を扱った章なので、他の天皇・皇族とは異なる。

長屋王は先述したが、天武天皇の孫であり、父は人麻呂が挽歌を捧げた高市皇子である。天平元年（729）、讒言によって一家は自殺した。名目、そして実質的にも最高権力者である左大臣長屋王が「左道を学び」と讒言されて死に至ったのは、ひとえに藤原不比等亡き後の藤原家の焦りと、暴走であったと推測できる。聖武天皇の光明夫人（不比等の娘）を皇位継承権を持つ「皇后」にするため、それに強く反対する皇族・長屋王を排斥したと考えてよい。

長屋王の変が少年家持に直接の影響を与えたのではないが、この藤原氏の専権の始まりをもって、壮年期の家持があったと保田は記した。

長屋王の変のあつた天平元年、家持は年僅かに十二歳であつただらう。彼がその事件を解さず、天平二年には既に父を喪つてゐる。越中の館で黄金出土の詔を賀く作をなしたのは、私案では三十二歳である。この作を見るとき、その詩文には完全無缺なる大丈夫の文雅のみを以てし、よく一つの意識を守る思想的自覚を僅か三十二歳にしてかくの如くなしあげたものは、わが朝の文學の歴史にさへ類ないものであつた。何を以てかくの如く云ふかは、やがて後に詳述するであらう。家持の二十代の多くの作品のみを以て彼を決定することは不當である。さうして壯年以後の彼の作歌が湮滅したのは、私には作られなかつたものと考へられる時さへあるのであ

る。彼の自覺の思想は、さう思はせる程に悲痛であり又深刻である。彼は人麻呂と異なる方法と精神からある陰惨な時代に國の精神を理會し、よく人麻呂と共通する精神を、人麻呂の教へに従つて、人間有情のみちにうちたてた詩人であつた。(時代(一))

▲藤原仲麻呂の分析

仲麻呂の分析箇所は、共時的には第十一章「回想と自覺」六節での {◎藤原仲麻呂、◎橘諸兄、◎山上憶良}、さらに第十二章「運命」一節での {○弓削道鏡、◎藤原仲麻呂} がある。

史的には、奈良京の聖武天皇時代、橘諸兄は右大臣（後に左大臣）になり、天平勝宝八年（756）まで長期にわたり政權を執った。この間、藤原広嗣の乱（740）を含んだ十八年の長期政權だった。しかし藤原仲麻呂の台頭により、職を辞した。息子の橘奈良麻呂は、家持も一度は関与した謀反謀議を、数回繰り返すが許された。しかし、最後は仲麻呂に抑えられ、光明皇太后に一旦は許されたが、後日謀殺されたと推量される。

ここでの結論を、家持の立場から見てみるなら、藤原四家が庖瘡で倒れ空白が生じた後、橘諸兄、奈良麻呂との親交があつたが、諸兄、奈良麻呂の失脚とともにより一層大伴家の立場が弱くなった。そういう壮年期であつたと言える。

5 まとめ

今回のテキスト分析は、図4に現れたように、通時性、共時性の両面から『萬葉集の精神』をみることができた。テキスト自体の性格に、家持以前の柿本人麻呂、家持少年期の父・旅人、父の知人の山上憶良、そして青年期、やがて政争激しい壮年期、晩年と、ほぼ家持の生涯を時系列にしたがって記したところがあった。このことがテキスト本体の通時的分析を可能とした。

次に共時的視点では、第八章「家庭と文化」前半での、[政治的空白]を埋

めるものとして大伴旅人がある。その後、旅人の死は家持の少年期だったので、実際の歌の手ほどきがどこまであったかよりも、旅人の知り合いだった山上憶良の影響や、あるいは大伴家のそれまでの大陸経営による異文化受容をともなった、華やかな文化的サロンが、家持の青年時を彩ったということがテキストに読み取れた。また、第六章「時代（一）」での六人の政治家が共時的に並んだ箇所、共時的視点導入の有効性が見えた。

この間、序盤の柿本人麻呂を最初の高峰として描いた章節をのぞき、他は家持が終始言及されていることが、図4の地図から明瞭に現れている。

以下に本論章節にしたがってまとめる。

まず3. 1において、テキスト『萬葉集の精神』で用いられている事項・人名用語を粗く抽出し、おおよその傾向をみた。表1のように、明瞭な事項として「家持」が上位を占めた。人名にはその他、柿本人麻呂、大伴旅人、藤原仲麻呂、山上憶良らが上位を占めた。この粗い抽出での上位120/15201（用語）に、人名はそこそこに上がったが、政治家の多いことに気がつく。個々の万葉歌人よりも、藤原仲麻呂、そして天皇ではあるが実質的国政に影響力のあった天武天皇、橘諸兄、長屋王らが目立って現れていた。万葉集の精神を国の歴史の中で描く立場から、このような結果になったと思われる。これはすなわち、大伴家持は私人であるよりも、名家・武門の氏上であり、彼の動勢は当時の政治事情と密接な関係があったことによる。

この表1を手技で大分類し表2をつくり、その結果を地図化したのが図2である。ここから『萬葉集の精神』は、人間とその精神とに重点を置いた作品であるとわかる。章としては第五章「言霊の風雅」、第十一章「回想と自覚」七節に主要なテーマが推量できた。

次に3. 2では、この人物と事項とを詳細にしらべ異同をみた。そこで、表5にある頻度の高い上位22件の人物・事項の名寄せを行った。

4. 1ではこの22件の用語群をクラスター分析し図3とし、そこから四つのクラスター {▲大伴家持、▲山上憶良、▲天武天皇、▲藤原仲麻呂} を識別した。

▲山上憶良は山部赤人や坂上郎女と同じく万葉歌人としてクラスターを形成した。人麻呂、旅人は別格として同クラスターには入らなかった。保田の解説では、憶良は家持の父・旅人の知り合いとして大伴家に出入りし、家持に影響を与えたと言及されていた。

▲天武天皇は、奈良時代の先駆けとして保田によって常に言及される人物といえる。

▲藤原仲麻呂は、○弓削道鏡とあわせ、家持壮年期における政治情勢の混沌とした時代を表しているといえる。

最後に4. 2で、同じ22件の用語群を地図化し図4を得た。この図4を先に得た四つのクラスターを参考に分析した結果、次のような結果を得た。

(1) 家持が第五章「言霊の風雅」以降に持続的に高頻度で現れるのは、保田が最初の四つの章を柿本人麻呂に費やしたことによる。テキストに当たると、保田は『萬葉集の精神』を、「神」のごとき人麻呂と、その「人」としての継承者家持、この両者に置いていることがわかる。

(2) 大分類「△政治」も、持続的に高頻度で現れるが空白部分がある。これを「政治的空白」とし、この間を埋めるものを大伴旅人への言及と判断した。旅人は天平二年に、大宰府から帰京したあとすぐに亡くなっているが、このころの旅人や、まして少年家持に政治的軋轢は殆どなかったと言える。

(3) 山上憶良が家持、旅人と共時的に第七章「少年期」で現れているのは、憶良が旅人と親交があった結果である。憶良については、第十一章「回想と自覚」二節で、保田が万葉集を<人麻呂→赤人→憶良→家持>という系譜に精神を見ることにつながっていた。テキストの別の箇所では、保田は旅人を憶良の上に位置づけているが、歴史全体に対する詩人としての「志」という観点から、旅人を外していた。そしてその四人の系譜を万葉集の美学として最も高く評価していた。

(4) 第六章「時代(一)」では人物が共時的に六名並んだ。{◎天武天皇、◎聖武天皇、◎文武天皇、大津皇子、◎藤原不比等、○長屋王}である。この章

では長屋王が高頻度を表し、長屋王の変を扱ったことが明確である。

長屋王の変は恐らく奈良朝文化の頂となつたものでなからうかと思へる。これを造型的表現にみても、所謂白鳳期といふ天平改元以前の文物に較べるとき、天平改元後の佛教文物は一見して様相を異にし、近代的な神経質な纖弱と冷酷を交へ、沈痛の表情をもつものも急坂に自身をおく感が多いのである。さうして藤原氏専權の端初は此頃に開かれたものであつた。天平はすでに藤原氏の時代であつた。その間にいくらかの變移はあつたが、大本の理法は藤原氏擅權を指すものである。即ち此は葛城氏蘇我氏のあとを踏まず、独自の變移のうちによく他勢力を表裏より打破した。恐らく藤原氏専權の犠牲の端初は長屋王の変であり、又その勢運の開拓の第一歩もこの事件にあつたのであらう。(時代(一))

(5) 藤原仲麻呂と弓削道鏡については、それ以前の橘諸兄をふくめ、壮年の家持に政治的関与を迫るものがあつたと思われる。

可視化をともなった本論結論は、図4から得たことをもって効果があつたと結論する。ただし本論では、テキストが難解長大なので、さらに追補としていくつかをまとめておく。これには可視化したことと、テキスト自体の精読とを合わせ記すが、多くは本論のデンドログラムや地図によって自然にガイドされたもの以外の所にある。

追補

それは歌そのものに関する解釈や鑑賞、そして現代人としての了解に関わることである。これは、可視化することが今回出来なかった。あるいはそれが、たとえば「物語」として『萬葉集の精神』を見るならば可能性もあるかもしれないが、あえて一般的に了解できる範囲で本論をとどめた。

このことは保田が萬葉集に見た「大君信仰」にかかわることである。保田は人麻呂にあっては、高市皇子の殯宮の時の挽歌、卷ノ二「高市皇子尊^{タケチノミコノミコトノ}城上殯宮之時、柿本朝臣人麿作歌一首并短歌」すなわち、かけまくも、ゆ^{キノヘノアラキノミヤノトキ}

ゆしきかも。言はまくも、あやに^{かしこ}畏き。で始まり「^{わたらい いわいのみや}度会の斎宮ゆ、神風に吹き惑はし」を含む屈指の長歌である。また家持にあっては、十八ノ卷^{ミチノクノクニヨリ・クガネライダセル・ミコトノリヲ・コトホグ}「賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌」すなわち、海行ば^{みづ}水漬く^{かばね}屍、山行ば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、^{かえり}顧みはせじと^{ことだ}異立て、の長歌である。いずれも、現代風の解釈では及ばぬところがあり、かといって戦前の国威発揚宣伝文句に使われた外装、表層的な考えでは本質を全く理解できない名歌である。

この二つを名歌であると本論末に記すのは、保田が続日本紀（続紀）を縦横に使って当時の政治状況を原稿用紙一千枚に詳細に展開していく間、常に私の気持ちが馳せたことによる。言葉の時代による乖離にとまどっても、なんども読み上げるうちに次第に歌の核のようなものが見えてくる。それはまだ今風にしか記せないが、イメージの喚起力にあって、内容が重厚であると同時に鮮烈な歌だった。このような歌を人麻呂や家持が歌い、残したというところに、万葉集の精神があったと言ってよいと思った。

また保田與重郎『萬葉集の精神』には、そのことに目を開かせる「精神」があった。これが文学なのだろう。

謝辞

データの整理について、坂口昭代氏（京都光華女子大学）のご助力に感謝いたします。

平成18（2006）年 9月30日 谷口敏夫 識